

アロマテラピーの夜

放射朗

と時をともに過ごす。約一時間の行為の後、僕はシャワーを浴びる。

浴室から出てきた僕を、彼女は缶ビールを開けて迎えてくれた。午後九時を少し回っていた。そろそろ家に帰る時間だ。

1

弥生の腰の線が好きだった。

風呂上りに、バスタオルを巻いただけで、弥生はベッドにやってくる。

僕はその水色のバスタオルを乱暴に引き剥がす。

弥生は蛹が蝶になるかのように美しくその瞬間変身する。

滑らかな白い肌。手がびたりと吸い付きそつだ。

彼女の肌と僕の掌が融合してひとつになるような感覚。

うふっ……とくすぐったそつに笑つ彼女は、僕の愛撫に

すぐにその声が変わっていく。

ろつそくの炎が暗い部屋にかすかにゆれている。カーテン

に映る影が海底に沈んでいるような気にさせてくれる。僕ら

の荒い息で部屋の空気が揺れているからだろうか。

アロマテラピー用のオイルウォーマーのろつそくだ。その

炎に熱せられたラベンダーの香りが部屋の中につつすらと

漂っている。

その微かな香りに包まれながら、僕らはつかの間の愛を確かめ合う。裸の二人はお互いの快感を高めるために、ひ

中村弥生は僕のよく行く会社の受付嬢だった。

セミロングの髪と、濃い目の眉毛。黒目が大きい澄んだ瞳をしていた。

小さな胸の胸に後ろに飛び出たお尻。ぐっとくびれた腰つきは目の保養にちょうどよかった。

視線を向けるたびに必ず目の会つ彼女を、ある日僕はランチに誘った。

そして唇食の場で今度飲みに行かないかと誘つと、今度もすんなりOKしてくれた。僕の左手の薬指に光る金色の指輪

を見ても、気にもしてない様子だった。

「前から好きだったんです、実は……」

混んだ居酒屋で飲んでいるときに、彼女はそつ言った。

ビールと日本酒を少々飲んだ彼女は頬を赤く染めていた。

僕は結婚してるし、離婚する気も無いよと言っただけ……。

「私も結婚できるなんて思ってません、ただ、今だけいいんです」

彼女の言葉は男にとって願っても無い言葉だった。男は誰でも美女を見れば抱きたくなる。愛情はとうてもいい。後からついてくるときもあるし、まったく感じないときもあるだろう。

女性から見れば無責任だとか、変態だとかなじる言葉はたくさんあるだろうが、健康な男の身体はそういう風に出てくるのだから、なんと言われようが仕方が無い。

28で結婚して10年。一人娘のみゆきも小学校にはいるうかという時だ。

妻との間には性交渉もすでに月に一回も無くなってしまった。どっして子供ができると女はセックスしたがらなくなるんだろう。

僕の友人の家でも似たような話を聞くことがあったのだ。

「アロマテラピーって知ってる？」

帰宅してスーツを家着に着替えていたら妻の由美子が側に来て言った。

「なんかで読んだ事はあるよ。ラベンダーとかセージとかの香料をろうそくで暖めて匂いを楽しむんだろう」

僕は地味なグレイのネクタイを外して妻に渡した。

「今度道具買ってきてやってみようかと思っただけど、どうかしら」

由美子は洋服ダンスにネクタイを掛けながら言った。「いや。僕はあまり好きじゃないんだ。悪いけど……。」妻は少し残念そうだったが、すんなり諦めた。アロマテラピーの夜は僕にとって不倫の夜だ。

2

次のデートの時、僕はそれ用の道具を用意していった。車の中でそれらを見せられた彼女は眼を見張った。付けまっけのように長いまつげが、もう少しで眉毛にかかりそうだった。

「ええ？ 長瀬さんってSMの趣味があったんですか？」

手枷に鞭。バイブレーターなど、散々変態趣味の道具をそれ専門のショップで買ってきていたのだ。

「そうだよ。知らなかった？ 嫁さんとはやらないけど、誰かできる相手を探していたんだ」

僕の言葉に弥生はひいてしまうかと思った。

もう会いたくありませんとふられるかとも思った。

そして、ふられるならそれでも良いとも思っていた。

つまり、この時はふられても大してダメージを受けない程度にしか彼女の事を思っただけだったという事だ。

でも、彼女は僕をふらなかつた。

面白そうですね、という弥生の言葉はもしかしたら僕の期待した返事じゃなかったかもしれない。でもそうやってしまったのなら仕方ない。

行き着くところまで行っただけだ。

僕は卑怯な人間だ。

S Mなら浮気とはいえないなんて思ってたのだ。

趣味の世界だから……。フォークソングの同好会とか、テニスクラブの付き合いと変わらない。妻を裏切ってるわけじゃないなどと、自分に言い訳がしたかったのだ。

国道沿いのファミリーレストランで、軽くランチを取った。そして助手席に彼女を乗せ、S M道具を満載した紺色のレガシランカスターは、たまに行く林道へ向かった。ホテルじゃなくて野外でデートしてやるつもりだった。

日直だからと出てきた日曜の午後。

秋の儂い木漏れ日を浴びながら、彼女の裸の腰を後ろから思い切り抱きしめてやるつもりだった。そして両手は縛り上げ、彼女の自由は全く無くなる。ろっそくを垂らし、熱がる彼女を想像すると、僕はそれだけで感じてしまっただ。

いつも車をとめる林道の広くなった場所で、いつもよりやや道の端に止めた。

道の端に生い茂っている雑草も夏の勢いはすでになくなり、寂しげだった。

途中、他の車とは一回もすれ違う事は無かった。ハイキングしている人影もまったく無い。

「ほら。ここでパンツを脱ぐんだ」

車の中で、そう言う僕の声はいつになくつわつている。ミニスカートの彼女はちょっと恥ずかしそうにしている。すぐに腰をずらせて脱ぎ始めた。弥生も興奮している。息に少し口臭がおった。

赤みのさした太腿が目の前に晒された時、自分の血圧が上がるのがわかった。

彼女は可愛いピンクの布切れを僕の目の前にひらつかせる。その布切れを奪い取り、匂いをかぐ。24歳の女性に、おい。

想像どおり、その布切れはかぎなれた匂いを強烈に発していた。

男を鼓舞する臭気を燦々と発していた。「やっばりな。嫌がってた割にはすっかり興奮してるじゃない」

いか。こつこついうのも良いだろ」

僕が布切れの中心をなめると、彼女は頬を赤らめて向こうを向いた。シートを倒して、弥生を寝かせる。

すぐにスカートを持ち上げると、濃い目の陰毛に包まれた恥ずかしい部分が現れた。

「ああ。やっぱり恥ずかしいです」

そう言いながらも弥生は全然抵抗しない。僕は弥生の膝を少し曲げさせ、強引に押し開く。

赤い肉の襞はすでに透明な液を溢れさせている。少し窮屈な中、足を少し持ち上げて腰を上げさせると、透明な液は後ろの方まで伝ってるのが見えた。

シートに匂いがつかないかちょっと心配だ。

「お尻の穴まで濡れ濡れだよ。そのうちアナルセックスっていうのもしてみたいね。楽しみにしてなさいね」

ふざけた調子で僕が言つと、弥生は両手で顔を覆ったままいやいやした。

僕は弥生の濡れた鼻裂に指をやった。するりと中指が滑りこむ。蜜のからまる抵抗を楽しみながら襞の間をかき回すように動かす。襞の中でこぼこした部分を軽く圧迫したりする。

うん。あ。弥生の甘い声が車中にとろけだす。

キスをするのと、すぐに熱い舌を絡めてきた。

ちよつと口臭がきつい。興奮してるからだろつか。ぬるぬるの舌をお互いに吸いあいながら、大きく広げた弥生の足の中心をまさぐる。右手の中指は全部入ってしまつて、親指で弥生の大きなクリトリスを刺激してやる。

実際弥生のクリトリスは大きかった。妻と比べても、3倍くらいあるんじゃないだろうか。

自分の小指の第一関節くらいまでの大きさとほぼ同じくらいだ。

もちろん大きくなった時の事だけだ。

弥生の感じる声はすごく素敵だ。妻はどんなに感じた時でも声を出すことがなかった。やっぱりセックスの時はかわいく鳴いてくれる女が一番だ。何かの本にセックスで声を上げない女は存在価値が無いなんて極端な事が書いてあつたが、ちよつとだけ同意してしまふ。

フェミニズム運動に荷担している女性には許せない言動だろうが……。

弥生のハンドバックの隙間から、ラベンダーの香りが微妙に漂っている。

アロマテラピー用のオイルをハンカチに染み込ませているのだ。

車用の香水なんかのきつい匂いと違って、ほのかに匂いつら

ペンダーは興奮を沈静させ、かえって長引かせる。

弥生は快感に耐え切れなくなり、僕の股間に手を伸ばしてきた。

ジーンズのチャックをぎこちない手つきで下ろしてくる。

その中で、すでに大きく変化をすませている硬い棒を苦労をして引きずり出す。

開いたチャックの間から出すのに窮屈だったので、僕はボタンを外してジーンズを膝まで下ろした。

彼女を愛撫していた僕の手は、彼女の柔らかくて軽い身体を離れた。今度は弥生がする番だ。倒したシートの上で横になり、両手を上げて、弥生の好きにさせてやる。弥生は僕の硬直した物を両手で握り、顔を近づけた。

真っ赤な口紅をつけた小さな口を大きく開いて、丸い亀頭を口に含む。舌がからまつてくる快感で僕は思わず声を上げていたが、しきりに深く口の中に入れた。のどの奥の方を突かれて苦しくないんだろっか、ちょっと心配しながら彼女の好きにさせる。

気持ちいい。でも　う……駄目だ。それ以上したら……

僕が身体をよじって逃げよつとすると、弥生はそっはさせまいと体重を押し付けてきた。

「ばか……、もついきそうなんだよ」

切迫した僕の言葉にも、弥生はお構いなくさらにペニスに対する愛撫を強めた。

駄目だ。はじける。自分の腰が自動的に動き出す。

甘美な陶酔とともに破裂する快感は僕の全身を突っ走り、股間の先端から勢いよく飛び出した。弥生の口の中に勢いよく二度、二度と発射した僕は、すぐに後ろの座席にあるティッシュペーパーを三枚ほど抜き出して弥生に渡した。身体を動かした拍子に車外の誰かと目が合った。

うわあ。

思わず声が漏れる。

大きな真ん丸い眼が二つ、メートルくらいの距離で僕らを見つめていた。

弥生もそつちを見て、んーと唸った。

口の中に僕の精液をためてるから声が出せないのだ。一瞬のぞきかと思ったその二つの瞳は、大きな一匹の鹿の眼だった。

僕自身より背が高そうな鹿が好奇心から車の中を覗き込んでいたのだ。

鹿にも僕らの驚きが伝わったのか、顔をのけぞらせたあと

すぐに後ろに跳びはね、木立の中に消えていった。

「えへへ、びっくりりして飲んじやいました」

弥生は口の周りを軽く拭きながらそう言った。

「毒にはならないから大丈夫だよ。でもでかい鹿だったな」

弥生はまだ僕の上に寄りかかったままで、左手は柔らかくなつたものを握り、もんでいる。その愛撫は時折拳丸のほうにも回されて、こりつとした軽い痛みを僕に与えてくれる。

「鹿にエッチをのぞかれるなんて新鮮な驚きですね」

口元をまだ湿らせたまま弥生は笑った。

「今度は外でしようよ。人間の交尾を見せ付けてやろう」

僕は弥生をどかせると、シートを起こした。

「大丈夫ですか……」

今出したばかりなのに、と言つのを弥生はぐっとこらえていた。

僕はまたそんなに年じゃないぞ、と言いたかったけど、僕もこらえる事にした。

3

ドアを開けて車の外に出る。秋の山の中はセミもすでに死んでしまったのか、聞こえるのはこおるぎや鈴虫などの声だ

けだった。

弥生を先に歩かせ、木立の中へ入り込む。

後ろからスカートを捲り上げて、弥生のふっくらしたお尻を秋の日差ししなかに露出する。白い肌が光を反射してきらめいている。汗でしっとり濡れたお尻は、真中あたりに少し吹き出物のぷつぷつがあつた。

「お尻のにぎびまで丸見えだぞ。ほら、その木に手をついてお尻をもつと高く突き出してごらん」

獣道を少し入ったところにあつた倒木を僕は指し示した。

「ああ、いやです。恥ずかしい」

弥生は身体をひねって逃れようとするが、本気じゃない。嫌がっているふりをしているのだ。

手をついてお尻を上げる弥生の腰に手を回す。反対の手は股間に滑り込ませた。

高く上げた弥生のお尻はまるで独立した何かの生き物みたいにつねつねとつごめいていた。

う　うんあ……あ。気持ちいいです。その辺駄目です。良すぎぬ。

立つてられません。ひっくり返っちゃう。

何本も指入れしないで。感じすぎます。

しだいに弥生の足がふらつき、とつとつその場にしゃがみこんだ。大きな杉やヒノキが生えていて、下草はほとんどな

い場所だ。

周囲はほとんど薄茶色の世界。その中で弥生の薄いピンクの尻が震えていた。

しゃがんだ弥生の背中を軽く押す。

「ほら、今度は地面に手をつけてよっんばいになってっらん。犬のようにお尻を高く上げて見せるんだ」

弥生は素直にひざと両手で落ち葉の上に這った。

いい眺めだ。上半身は服を着てるから余計に下半身が強調されて、ふくよかな尻だけの生き物が地面から生えているように見える。

「足を伸ばしてお尻を高くして」

お尻のつぼみとゆるゆるの裂け目がぐっと浮かび上がってくる。

僕はすでに痛いくらいになってる自分のものを取り出して、その割れ目に合わせた。

スムーズに根元まで入れ込んでやると、弥生は今度は自分から腰を動かし始めた。

動きにくい体制なのに、懸命に腰を振って僕の物を挟み込む。そして締め上げる。

うんうんあーん。いきそっ。いく……。

弥生の声は虫達の声と混ざり合って薄暗い森の中に絵を

描いてるようだった。

二度目だからまだまだ大丈夫、と思っていたが、初めての野外セックスの興奮はあつという間に僕を危ない領域に誘い込む。弥生の締めまりもすごくいい。根元から先までやんわりと、少しずつ強く締め付けてくる。

避妊具もつけてないのに、弥生の中に出してしまいそつだ。弥生の尻と自分の密着した部分を見下ろしていた僕は、一瞬何か違和感をかんじた。ぬるりとした熱い塊に自分の物が当たったような変な感じ。

今度は弥生と向き合ってキスをしながら入れてやろう。

そつ思った僕は、なおもくわえ込もうとする弥生の尻を押さえて、抜き出した。

暗い割れ目からずるずると僕の物が出てくる。

真っ赤に色づいている。真紅の血液にまみれた僕のは、怪物に啜えられて、噛み砕かれたみたいに見えた。

血だ。腰がふらついて足に力が入らなくなる。

頭の中がリセットボタンでも押されたみたいに一瞬のうち空虚になる。

眠りに落ちるような感覚が……。

頬に痛みを覚えて目がさめた。覗きこむ弥生の顔がアップ

で迫っていた。背中に柔らかい枯葉のじゅうたんを感じる。

「目がさめましたか、良かった。脳出血でもしたらどうしようと思っちゃった」

やさしい眼が僕を見つめていた。

「ああ。ごめん。もう大丈夫だから」

僕はどうしたんだっけ。

「すみません。もうそろそろかなとは思ってたんですけど、ちよつどの時に始まっちゃって」

弥生の顔はいたずらっ子のように笑った。彼女の着衣はすでにきちんと整えられていた。

「でも、血まみれのをれを見たくらいで失神しちゃうなんてちよつと情けないですよ」

悪戯小僧のように弥生は笑った。

「情けないことだけど、僕は血を見るのが苦手なんだ」
起きようとしたけど、うまく起きれなかった。

今気づいたが下半身は裸のまま、空気の動きに陰毛がそ

万歳した両手が下ろせない。細めの立ち木を巻くようにして僕の両手は手錠をかけられていたのだ。

「ちよつとそのままですよ。さっきいけなかつたみたいだから今度は私が長瀬さんをおかわいがつてあげる」

弥生は笑顔だったが、遠慮するよといえない押し強さがあった。

「でも、脳出血がもしれないなんて思った相手にこれは無いだろ」

柔らかに抗議する。

「そんな年でもないでしょ。多分ただの貧血だつて、見ればわかりますよ」

弥生はそんな事を言いながらSM道具の入ってる包みを物色している。僕が失神してる間に車に戻って持ち出してきたのだらう。

弥生は包みの中から赤いろつそくと、百円ライターを取り出した。

「え、ここでするつもりかい。それはやばいよ。一步間違つたら山火事だ。それに僕は熱いのは苦手なんだ」

「熱いの得意なんて人は居ないですよ。それに、これSM用の低温ろつそくだからやけどの心配は無いみたいです」

やけに詳しいな。まさか弥生がSMマニアだったなんて落ちじゃないだらうな。

「つぶぶ。インターネットでSMのページ眺めるのわりと好きなんですよね」

そう言いながら弥生はライターでろうそくに火をつけた。周囲は乾いた枯葉のじゅつたんだ。一歩間違えれば辺りはすぐに火の海。それに僕は手錠をかけられて身動きも出来ない。背中にじんわり汗が染み出すのを感じる。

ろうそくを揺らしながら熱い蠟をためた弥生が僕の身体の上にその手をかざした。

「暴れちゃ駄目ですよ。もし私が転んだりしたら、大変ですからね」

「冗談はそこまでにしようよ。ほら、手錠を外しなさい」「冗談か冗談じゃないか。これ買って来たの長瀬さんですよ。長瀬さんは私にろうそくたらしめてみる気だったんでしょ」

「いや、君の反応を見たかっただけだよ。本気でするつもりは無かったんだ」

そんな事言っているうちにろうそくの縁から溢れるくらいに熱い蠟が溜まっていた。

弥生の手首が動いてその赤い液体が僕のへそのあたりに落ちてきた。

熱い……けど、その熱さは一瞬で消える。やはり低温ろうそくといつのは本当なのだろう。想像したほどの苦痛ではないようだ。

「ほら。それほど熱くはないでしょう」

「ひよっとして自分でやったことあるのかい？」

「つぶぶ……実はあるんです。一人でろうそく遊びするのが趣味だったんですよ。今度はかわいくなってるおちんちんにいきますよ」

「ああ、それは止めてくれよ。そこはちよっと……」
僕の言っ事なんてまったくお構いなしに、弥生は股間に蠟をたらしした。

「うわあ！今度はかなりきいた。ペニスにも玉にもたらたら熱湯のように熱い蠟が落ちてくる。」

「ぎゃあ。熱いよ。そこはちよっと効きすぎだ」

「まだまだ。たっぷりかけてあげます」

さらに何度か股間に熱い襲撃がやってきた。でも、ろうそくが固まると、蠟の上に蠟が落ちてくるから、ワンクッション置く感じで熱さが和らいだ。

「じゃあ今度は両足を上げて折り曲げるようにしてください。お尻の穴に落としますから」

弥生は、また勝手なことを言い出した。

「お尻はいいよ。もう終了だ」

「言っ事を聞かないところですよ」

スニーカーを履いた弥生の足が持ち上がり、僕の股間下に落ちてきた。

僕はとっさに身体をよじってその襲撃をかわす。

「駄目ですよ動いちゃ。私が転んだらどうなるかさつき自分で言ってたでしょ」

そうだった。彼女を転ばせたら火の海だ。

僕は逃げる事も出来ずに焼死体だ。下半身裸の。

まあ燃えてしまえば裸も何も無いけど……。

僕はおとなしくする事にした。

弥生のスニーカーは僕の股間にかぶさり、睾丸を圧迫した。うぐう。圧迫痛で無意識に身体が丸くなる。横向きに丸く

なった僕の足を、弥生は片手で持ち上げて、肛門が上を向くように位置を変えた。直後に熱いしたりが尻の谷間に落ちてきた。熱い滴りは肛門を直撃する。

「もう許してくれ。熱いよ」

どうにもならない状態に僕は悲鳴を上げた。

「そのまま動かないでお尻を上に向けておくのよ」

弥生は命令口調に変わってきた。

自分の思い通りに男を動かす事に興奮してきたみたいだ。

弥生は女王様の素質があつたんだろうか。全然そんな感じには見えなかったのに。僕には奴隷の素質はあるんだろうか。

ふと、女王様ファッションに身を包んだ弥生の足の指を舐める裸の自分を、想像してみた。

胸に迫るわくわくした感じを少し味わったが、やはり自分の嗜好とは違う気がする。

それから蝋燭が半分くらいになるまで肛門や股間に熱い蝋をたらされた。熱さは次第になれてくる。

それより、相手に命令されるままに足を広げたり腰を突き出したりしている屈辱感が、僕の頭の中で蝋以上に熱くたぎり、流れ、やがては固まっていた。

4

次の日は一日中肩や腰が痛かった。

あんな変な格好を強要されたんだから当たり前だ。家から出掛けに腰をさすってる僕を見て、妻が不信そうな目で見ていた。

「日直で何かあったの？ 昨夜も早く寝ちゃうし……」

上目使いで僕を見る妻の眼は、すぐに僕の下半身に注がれた。

最近ご無沙汰だから欲求不満なのよといいたげだった。

「ごめん。棚卸しを手伝わされて、急に重いものを持ったせいでよ。すぐに良くなるから」

何とか言い訳で切り抜けた。レガシイのエンジンをスタートさせ、ガレージを出ると、約40分かけて会社に向かった。

その日の午後、商談の打ち合わせをするために、僕は弥生の会社に寄った。

受付嬢をしている弥生に、わざとらしく会釈をして、片岡課長への面会を求めた。

周囲には誰も居ない。受付の奥の部屋に事務員が二三人居るようだった。

「第一応接室で片岡課長はお待ちです」

弥生は言いながら僕の手の甲を軽くつねった。

眼は濡れたように光り、唇と耳たぶが妙に赤くなっていた。商談がすんで帰社しようとしてると、受付の前で待っていた弥生が近寄ってきた。

「市役所に書類の提出に行くんですけど、良かったら乗せてもらえませんか」

弥生の声は耳に心地いい。男心を微妙にくすぐる術を生まねつき身につけてるみたいだ。

営業用の軽自動車に仲良く並んで乗り込んだ。

「今日も会いたいな」

車を出すと弥生が単刀直入に言いだした。

「今日は駄目だよ。早く帰ると言ってきたから」

僕の返事は予想していたみたいだ。

弥生はがっかりするでもなく、僕の太腿に手を伸ばしてきた。

「運転中に変なことするなよ」

本当はして欲しいのを悟られないように、僕は言った。

弥生の手が僕のズボンのファスナーにかかる。

この娘ってこんなに淫らだったっけ？

認識を改めないといけないのかもしれない。

真昼間の国道をのろのろ走る車の中で、弥生は僕のを完全に露出させると、いきなりかぶさってきた。

ギヤチェンジが出来なくなつて、速のままアクセルで調節しながら、国道の緩やかなカーブを回る。

弥生は僕のを口に含むと、軽く歯を立てたりしながら優しく亀頭の縁を舌で刺激する。手で玉を揉むのも忘れていない。

「ちょっとは手加減してくれよ。このままいたりしたら電柱にぶつかっちゃうよ」

弥生の舌の動きが速くて我慢できなくなりそうだった。

「私をこんなにエッチにしたのは長瀬さんなんだから。今までこんな事した事無いんですよ」

恨めしげに言つた弥生の顔を僕は左手で押さえて、その艶やかに濡れた赤い唇の中に思い切り発射した。弥生の喉から「クリ」と言つた音が聞こえてきた。

何とか電柱にぶつかる前に路肩に停める事ができた。

僕の足の上で見上げる弥生の横顔は、今までになく卑猥な色気を放っているようだった。

「先日はごめんなさい。あたしなんだかすごく興奮して自分を失ってたような気がします」

弥生が僕の腕の中で、小さくつぶやいた。山中での一件の事だ。弥生のマッシュョンで一戦終わってほっと一息ついているところだった。

ベッドの上で、お互い全裸で抱き合っている。

弥生の滑らかな肌が、僕の身体に密着し、汗で濡れた弥生の腹がねっとりとして気持ちよかった。アロマテラピーのろうそくの光がゆれる。ミントの香りが漂っている。

結局、妻には急に残業が入ったからと電話し、不満の声を聞く前にすぐに電話を切った。でも出来るだけ早く帰りたい。一戦終わった所だし、そろそろ服を着ようかと思っていた。

「弥生は女王様の素質があるよ。なんかまたやってみたいと思ったりして……」

本当はもつこりごりだと思っていたが、ついそんなことを言ってしまった。

「ご機嫌取りか……、情けないな。」

「女王様だなんて……。でも、思ったんです。長瀬さんは奥さんと普通にセックスしたりしてるわけでしょ。私も普通に抱き合っただけじゃ、長瀬さんにとって日常の延長でしかなくて、記憶にも残らないんじゃないかと思って……」

弥生の眼はきらきらしていた。

「それで？」

変な雲行きになりそうだが聞かないわけにはいかない。

「このあいだみたいな事たくさんすれば、長瀬さんの記憶の中に深い足跡をつけることができるんじゃないかと思っただんです。私たち、結婚する事も出来ないし、長瀬さんの子供を生む事も出来ないのなら、二人の記憶の中に深い足跡残すくらいしかないから」

やはり弥生はサディズムの興奮が忘れられなくなったんだ。あの時の眼は尋常ではなかったし……。とって無下に断るわけにもいかない。

下手をすると弥生は妻に洗いざらいぶちまけると言い出しかねない。

そんな気がしてきた。弥生の言葉が僕にフレッシュャーをか
けてくる。

脅かされているみたいない気分だった。

「長瀬さん、ちょっと目をつぶってくれますか」

嫌な予感がしたが僕はおとなしく目をつぶった。

横で弥生が体を起こしている。何をするつもりだろう。眼
を開きたいのを懸命にこらえた。

ベッドのマットレスがしなってる。弥生は立ち上がったみ
たいだ。

そしてベッドがゆれて……。

顔にかかる微かな空気で何かが顔に覆い被さってきたの
がわかった。

「目を開けていいですよ。でもすぐに何も見えなくなるか」
弥生の声が降ってくる。

目を開けると、目の前に弥生の尻の穴が迫っていた。後ろ
向きに立った弥生がしゃがんで、そのまま腰を落としてくる。

すぐに僕の口には弥生の亀裂がかぶさってきた。

前技でクンニリングスすることはあったが、こんな風に顔
面騎乗されるのは初めてだった。

弥生の女の部分がぬるぬるになっている。舌を入れて弥生
の中心を味わう。

さっき舐めてやったときと比べ物にならないくらい愛液

を溢れさせ、弥生は気持ちよさそうに僕の顔に体重をかけて
きた。顔を尻でねじ伏せられている。

愛の行為とはいえ男にとっては屈辱的な格好だ。でも、本
気を出して振り払えば、振り払う事もできる。自分が容認し
てやってくるからこそそのプレイだと思えば、その屈辱もそれほ
ど感じなくなつた。

弥生は僕の顔に恥ずかしい部分をすり寄せて感じ入って
いる。

うん あん……いい。

……もつと舌を突きいれて。

そんな声を聴いているうちに息が苦しくなってきた。
顔をよじって空気を吸おうとするが、弥生の体重が重くて
思うように動けない。

背は高いが豊満な感じではない弥生の事だ。体重も50キ
ロ無いだろう。

でも頭一点に体重をかけられると、簡単には振り払えない。
萎えている僕のペニスを弥生が握った。睾丸のほっにも手
を入れて、揉みしだく。

興奮してるからだろう。力加減がつい強くなって苦痛にな
ってくる。僕は両手で弥生の尻を叩いた。腰をあげるように
合図を送る。

弥生はそれでもお構いなしだ。

あい変わらずスレンダーな身体には不似合いな豊満な尻を押し付ける。

とつとつ我慢できなくて僕は弥生を振り払った。弥生はフランスを崩してベッドのサイドテーブルにおでこをぶつけた。

「痛い、ひどいですよ。もう少しでいきそつだったのに」唇を突き出してそつ言つ弥生はかわいかったが、立ち上がり腕組みした時にはそのかわいさは消えていた。

「悪い子には御仕置きをしないといけないわ」スイッチが切り替わったかのごとく弥生は口調を変えてきた。

「息が苦しかったんだよ、口も鼻も閉じられてるんだから少しは気を使えよ」

このまま主導権を渡してはいけないと、僕も少しきつく言ってみた。

「奴隷が生意気な口をきくんじゃなわよ、思い知らせてあげるわ」

自分の言葉に酔っているのか、弥生は顔つきまで変わってきたみたいだ。

「冗談だろう。もついいよ。今日はもつ帰る。あんまり変な遊びに走る気ならついていけないよ」

立ち上がるつとした僕を弥生は突き飛ばした。

「駄目よ。言つとおりにしなないと奥さんに全部ばらしてやるから」

弥生は最後の切り札を切ってきた。今までもつと、優しくて素直でかわいかった弥生はいつたいどこへ行ってしまつたんだろつ。

それともこれまで本性を隠して僕とつき合つていたので

「どうしたんだよ、弥生。今日は変だぞ」

あまり強く言えば逆効果だと思ったので、今度は下手に出ることにした。

「いいから両手を膝の下に回しなさい」

弥生は相変わらず強い口調で言う。僕はとりあえずいつ事を聞く事にした。

膝を立てて座ったまま両手を拘束された。

僕が買ってきた手枷だ。それらの道具は家にもって帰ることはまずいので、弥生の部屋に預けていたのだった。

こんなふう拘束されると立ち上がる事も出来ない。弥生に押されて、僕はそのままベッドに転がった。

自分の手で両足を持ち上がり、尻の穴が上向きに露出する。何とも情けない格好だった。

「ふふふ、いい格好だね。今日はお尻をたくさん責めてあげます。それから一滴残らず搾り取って、奥さんとは全然エッチが出来ないようにしてあげる」

弥生の目が光った気がした。弥生は本当の自分を見つけてしまったのかもしれない。サディズムの本性に目覚めたのかもしれない。

何をされるのかはらはらしながら待っていると、弥生の右

手に短めの鞭が握られてるのが見えてきた。

「最初はお仕置きよ。少し痛めつけてあげる。反対向きになつてお尻を突き出しなさい」

仕方なく言われた通りに体位を変えると、すぐに最初の一撃が僕の尻に打ち下ろされた。焼けるような痛みが瞬間的に湧き上がり、じんわりと拡散していく。

「痛いよ！許してくれ」

僕の言葉はぜんぜん聞こえないのか、まったく無視される。さらに一発目、二発目と続けざまに鋭い音を立てながら鞭は振り下ろされる。

焼けるような痛みは引くひまもなく次々に湧き上がってくる。どうにも我慢できない苦痛だった。

鞭打ちがこんなに痛いなんて知らなかった。やめてくれ、から止めてください、許してくださいに変わるのに大して時間はかからなかった。男のプライドなんかかなぐり捨てて、弥生に懇願している自分は客観的に見れば自己嫌悪もはなはだしいありさまだろうが、とてもその時は屈辱を感じている余裕もなかった。思わず涙がこぼれるくらいの痛みだったのだ。

「これで30発どうですか？自分が鞭打たれるなんてわかってたらこんなもの買つてこなかったのに、何て思いましたか？」

か？」

弥生の口調が少しやわらかくなった。顔の表情にも笑みがうかがえた。

散々痛めつけられ、プライドも捨てて涙ながらに懇願する僕を見て、少しは気が済んだのかも知れない。

「次は浣腸ですよ。じゃあ浣腸してくださいってお願いしなさい」

弥生はバッグの中からガラス製の浣腸機を取り出した。「言えないの？自分でお願いしなさいって言ってるでしょ」僕は唇を噛み締めるだけで、何も言わなかった。これ以上何をしようというのだ。

鞭が音を立てて振り下ろされ、再び尻に激しい痛みが襲った。

「言わないとあと30発おまいますよ。浣腸よりも鞭の

すつと振り上げられる鞭を横目で見て、僕は降参した。

「お願いします。浣腸してください」

悔しさに言葉じりが震える。

弥生の抑えた笑い声が微かに聞こえた。

尻を突き出した格好で、浣腸器の先端が挿入されるのを待つ。何とも情けない格好だ。今まで妻を裏切ってきたバチがあたっただらうか。

やりきれない思いは僕の中で快感に変容するわけもなく自分にはマゾの気はないんだと、改めて思っていた。

僕にマゾの素質があったとしたら、弥生はこの上ないパートナーになっていたかもしれない。でも、こうやって一方的に責め苛まれることは、僕にとって屈辱以上には変化しようがないものと思えた。

冷たいガラスの先端が肛門に接触した。

ゼリーをぬってるからスムーズに先端は挿入を果たす。

3センチくらい入ったところで一旦とまり、今度はグリセリンを薄めた薬液がじわりと入ってきた。

尻を上に向けて腹ばってるから薬液はどんどん奥まで入ってくる。

「はい。200CC入りましたよ。じゃあ10分は我慢してくださいね」

その時は10分くらいならと思っていたが、ほんの3分

らいで腹が痛くなってきた。

「もうきつくなってきたよ。トイレに行かせてくれ」

「行かせてくださいでしょ。まだ自分の立場がわからないの？ トイレじゃなくしてお風呂でさせてもいいのよ」

「すいません。行かせてください」

僕はすぐに謝った。彼女も流れ流されるのは困ると思ったのか、案外素直に僕の腕を解いてくれた。

腕が自由になった。立ち上がることもできる。

発作的に弥生の首を絞めてやるつもりだったが、理性でいうより便意に勝てずにトイレに駆け込んだ。

これほど屈辱を受けても何も仕返しができない。体力では勝てるのに、弱みを握られているから言いなりになるしかない。これからどうなっていくのだろう。

自分でまいた種とはいえ、恐ろしくなってくる。

僕が屈辱になれて、それを快感と思えるようになるのが早いか、弥生を絞め殺してしまうのが早いか……。

このままいくと自分が殺人犯になってしまつのもあながちありえない未来ではないように思えてきた。

トイレのあと、シャワーを浴びせられ、再び僕はベッドで腹ばいにされた。

弥生の手には膣用の中型パイプが握られている。

あれを入れられるのだろう。痛みはどの程度だろうか。そ

れほど太くはないはずだ。多分3センチくらいかな、直径は

「それじゃあ行きますよ。痛くないようにゼリーをたくさん塗りましたからね。お尻の力抜くんですよ」

子供でも論すような言い方だった。

下品な紫色のパイプは振動しながら僕の肛門を押し広げてきた。ズキンと切るような痛みが湧き上がる。

「やめてください。とめてとめて、それ以上入れないでください」

涙声で僕は叫ぶ。一旦弥生の手はとまったが、どうにも我慢できない痛みはぜんぜん消えずにさらに倍増していく。

「抜いてください。我慢できない」

「だめです。しっかり根元まで入れてやるんだから。少しは我慢しなさいよ。力は抜いたほうが痛くないですよ」

パイプの振動が止まった。弥生がスイッチを切ったのだ。た。

少し引かれて痛みがすっと消え去ったと思ったら、再度強引に僕の直腸の奥深くまで、そのくいは打ち込まれた。

ぎゃー

自分の悲鳴が他人の声みたいに聞こえていた。

気を失つかと思ったが、強烈な痛みは不思議なことに持続せず、すぐにあっさり消えていった。

「痛みが消えたみたいですね。ある所でふっと痛くなくなる

んですよ。アヌスがいきなりめて言うことをきくみたいに……」

弥生の口ぶりはすでに経験者のそれだ。ろうそくだけでなくアナルの拡張も経験してるのだからか。

僕は弥生のことを何も知らなかった。その弥生が僕に本当の自分をさらけ出し始めた。僕はいつたいこれからどうなっていくんだらう。

肛門の感触が少しずつ快感に変わっていく。

同時に弥生の手でペニスがしこかれたすと、その快感は決定的なものになり、僕は喘ぎ声さえ上げ始めた。

自分ではどうにもならない状況で女の手で一方的に快楽を与えられる。

そんな状況が好きな男も多いだろう。

僕も、プレイとしてたまにするのなら案外気持ちよく身を任せられるかもしれない。でも、今は違う。弥生に逆らえば、妻にばらされて自分の家庭はめちゃくちゃにされてしまう。その恐怖感で縛られるのは、肉体を責められる以上につらいものだった。

ゼリーでぬるぬるした弥生の手は本当のセックス以上にペニスに快感を与えてくれる。

「もういきそつだよ」

腹はいいのままではシーツを汚してしまふ。僕はよつんばい

で尻を突き出す格好をさせていた。僕の左側に座った弥生は右手でバイブを操り、左手で硬直したものを擦っている。

「そのままいって良いですよ。シーツに飛び散るのを見たいから」

アナルを犯されながらの二回目の発射は、最初の普通のセックスの時よりも数段よかった。溜まっていたものが一滴残らず噴出すのが感じられた。

「じゃあシーツをきれいにしてください。舌できちんと舐めとってください」

弥生の言葉は意外とは思えなくなっていた。

この流れで来れば、そういつ命令もありそうなことだからだ。でも、それにすんなり従えるほどには、僕の壊れ方はひどくなかった。

「嫌なんですか？」

動かない僕に痺れを切らして、弥生が聞く。

言いながら僕のアナルに深深と入ったままのバイブをひねるように動かす。

う、痛い。射精と同時にアナルが収縮して強く締め付けた状態だったからだ。

射精するまではそれなりに快感だったアナルの蹂躪も、いったん欲望が終わってしまうときつい異物感しか感じなく

なる。

「もう許してください。尻が痛いです」

出来るだけ下出に出た方がいい。いかにも哀れな口調で言ってみた。

「早く舐めなさい。シーツに染み込んでしまつてしょ、嫌だ」というのなら……」

言わなくてもわかっているでしょと言つよつに弥生は言葉を切った。

僕は仕方なくたつた今自分が発射したシーツの上の白濁を舌で掬い取った。

二度目だったからそれほど量が多くなかったのは幸運だったが、のどもとに粘る感触と変な味わいは、その後長く僕の口の中に残り悩ませてくれた。

「まあいいわ。じゃあ最後にもう一ついいこととしてあげます」

一度ベッドから降りて、しばらくして弥生は戻ってきた。

「じゃあ仰向けになつてください」

戻ってきた弥生の手には、安全かみそりとシェービングクリームが握られていた。

6

その夜、家に着いてガレージに車を入れたとき、車のデジタル時計は9時20分を表示していた。

部屋に入るとプンと嗅ぎなれた匂いがした。ハーブの匂いだった。

「わかった？ミントの匂いよ。アロマテラピ―の道具買って見たの。良いでしょ」

僕の遅い夕食を並べながら妻が言った。

先日僕に反対されてあきらめていたと思っていたが、実はその時すでに通信販売に申し込み用紙を送っていたのだった。

「本当だ。思ったよりいい感じだね」

心が安らいだ。ふつと力が抜けた感じだった。

さっきまでの緊張が解け、帰るべきところに戻れた安堵感で、僕は自然に笑顔になれた。

「最近疲れてるみたいだから。今日は早めに寝た方がいいわよ」

いつに無くやさしい言葉をかけられて、思わずほろりときそつた。

「お父さんおかえりなさい、今日も残業だったの？」

みゆきが眠そうな顔をして居間からキッチンに入ってきた。

僕と妻のいいとこ取りのかわいい顔で笑いかけてくる。

「みゆき、まだ起きてたのか？明日も学校たる、もう寝なさい」

僕に頭を撫でられて安心したのか、みゆきはフンフン鼻歌

歌いながら二階の自分の部屋に上がっていった。

由美子が注いでくれたビールがグラスからあふれ出る。

僕は慌てて顔を近づけ、一口すすった。

なんてことは無い日常の時間が僕の神経をゆっくりと正常に戻してくれる。

弥生と会うのはもう止めよう。

何とかして謝って、へそくりをはたいてもいい、どうにかして手を切るように努力してみよう。

疲れていたせいかビール一本で結構いい気持ちになって

しまった。夕食を済ませて風呂場へ行く。

白いタオルを敷き詰めた冷たい洗い場に立つと、壁の低い位置にある鏡に、自分の下半身が映し出されていた。

情けない格好にされたもんだ。手で触ると、剃られた個所が少しちくちくしていた。

湯船に浸かって、弥生に切り出す別れ話を考えていると、脱衣所に人の気配がした。まさかと思っただが、次の瞬間引き戸が開いて全裸の由美子が入ってきた。

新婚時代以来のことだ。

「みゆきはもう寝たから……。久しぶりにね」

由美子は洗面器でお湯をすくい自分の下半身をきれいにしている。

僕は慌てて体をひねった。

「どうしたのよ。恥ずかしいの？」

僕の反応に由美子は不思議そうな顔をする。

まずい。どうしたものか。

僕の頭が高速回転し答えを探す。見つからないようにあがる方法、見つかった場合の言い訳、それらがいくつも浮かんでは消えていく。

つぶつと色っぽい笑みを浮かべて由美子の手のひらが僕の股間に降りてきた。拒絶するのも無理がある。

僕は覚悟を決めて由美子のしたいようにさせた。

由美子は湯の中でやわらかくなるんだ僕の玉をもみへんを握ってきた。

「最近ご無沙汰だったから、欲求不満じゃないの？」

こうなったらばれるのは時間の問題だ。

僕の思考が、ばれない方法からばれた時の言い訳に速やかに変更される。

毛じらみがつつつちやたって、誰からつつつされる？かみそりの刃の切れ味を確かめてるうちに、つい面白くな

って、駄目だ。僕は髭剃りは電動式を使ってる。困った。

僕の困惑してる様子を勘違いしたのか、由美子は心配そうな顔になった。

「変ね。二気にならないわね。まだそんな年じゃないし……大丈夫よ。ちょっと疲れてるんじゃない？ベッドでゆっくりすればすぐに元気になるわよ」

僕は気づかれる前に先制攻撃をかけることにした。

「ごめん。実は君に隠してたことがあるんだ」
僕はそう言って湯船で立ち上がった。

由美子の顔の高さに、ちょっと僕の股間がくる。

一瞬上げた目線が僕の股間に降りた時、由美子は唖然とした顔をしていた。

「ここどうしたの？毛がなくなってるわよ」

陰毛をきれいに剃られた男の股間を見たとき、女性は普通どう思うのだろう。

変態だっと思っただろうか。何かの病気で、検査のために剃ってあると思っただろうか。髭毛マニアの生体については普通の女性はあまり知らないだろう。

自分の陰毛をそり落とすことで性的に興奮する男がいることなんて、信じられないだろう。実は僕も信じられない。

でもそのスマミアを演じるしかないよ、このとき僕は考え

ていた。

不倫よりもその方がまだ由美子にとってはましなのではないかと考えていたのだ。

「君には理解できないかもしれないけど、僕はこうするとすごく興奮するんだ。自分で剃って、そんな自分の恥ずかしい格好を想像しながら自慰するのが……好きなんだ」

由美子の表情を見る勇気が無くて、僕は目をつぶってゆっくり言った。

「あきれた。びっくりしたわ。なんて言ってるのかわからないのか……」
突然の告白にどうしていいのかわからないでいる由美子をおいて、僕は風呂場から出た。この後どうなるかはわからない。予断を許さないってやつだ。

結婚した当初なら多分拒否反応がまず出るだろう。

男の奇妙な性癖についてなど、若い女性の理解の範疇から大きく逸脱してるはずだから。でも、由美子も37歳だ。人間としても女としても十分成熟してるのだから、案外笑って許してくれるかもしれない。

そんな趣味があったのならもっと早く言えばいいのに、あたしが剃ってあげるわよ、なんて同調してくるかも。

裁きを待つ罪人の心境でベッドに寝ていると、由美子がバスタオルを巻いた格好でやってきた。そしてタオルを取ると、全裸の体を僕に預けてくる。

「ごめんね。あたしがほったらかしにしてたから変な趣味覚えたんでしょ」

由美子が謝ってくるのは予想外だった。

本当は僕が一番悪いのに、由美子に気をつかわせるのはさすがに心苦しい。

「いや、昔からちよつと変な癖があつたんだ。黙ってたのは嫌われるのが怖かつたから。自分で自分の尻を鞭打ちしてみたり、そつそくを股間にたらしめてみたりして一人で遊んでたんだけど、ずつと我慢してた髭毛もついでこの間とつとつやつてみたってわけで……」

さすがにちよつと言い過ぎたかな。これじゃあ完全な変態って思われてしまうのではないか？ そつ思いながらもいったん口から出てしまつと止まらなくなつていた。

「そつやつて想像上で女性に責められることを考えるのが趣味なんだ」

弥生とのがあつたからだろそついで自分がマゾだと言つてしまつ。

「他の女の人とSMやつたことは無いの？ 素人じゃなくてプロの女王様とかとは？」

「独身時代に行つてみようかと思つたことはあるけどね結局勇気が無かつた」

「それって、案外面白いかもね。ちよつと待つてて」

由美子はそつ言つてベッドルームから出て行つた。

そして5分程たつて、戻つてきた由美子の手には30センチくらいに切られたゴムホースが握られていた。

「これならあんまり音がしないはずよ。ほら、よつんばいになつてお尻を上げて」

「どついうこと？」

僕は思わず聞いてしまつ。

「レディスコミックで読んだことあるのよ。鞭打ちにはこれが最適だつて、音が小さいのに、痛さは抜群なんだつて」

いや、そつじゃなくて、と言いたいのをぐつとこらえて僕は由美子の言つとおりにした。

思いもかけず強烈な一撃が、不意に僕の尻を襲つた。

痛い。数時間前、弥生に打たれた時の痛みと比べても数段痛かつた。

弥生が使つたのはスパンキング用の先の平たいものだったから、ある程度痛くないよつに出来ていたのかもしいない。

さらに二発目が襲つ。

ジーンと来る熱い感覚が尻全体を包み込み広がる。

『痛いよ。やめてくれ』そつ叫びたかつたが、できない。避けて逃げ出したかつたが、前後の脈絡を考えるとどつしても逃げ出せなかつた。

バシリ、バシリと連続して打ち下ろされる打撃は、痛みを通り越して僕の体全体をやけ焦がす炎のように燃え上がる。

「おかしいね。まだあそこが元気にならない。あたしが力弱いから、ベテランのあなたには物足りないのかな。でも大丈夫よ。だいたいこつがわかってきたから。すぐにギンギンにさせてあげる」

左手で僕の緩んだペニスを握りながら、右手のゴムホースを由美子は持ち直す。

さらにスピードを増したゴムホースの風を切る音が聞こえた。打撃による痛みはだんだん感じなくなる。それより全身が熱かった。

ミントの香りの漂う中。アロマセラピー用のろうそくの炎がゆれている中で。

こういっのを天罰観面って言うのかな。

ぼんやりとする意識の中で、いつそのこと失神してしまいたいと思う。

そうして燃えるような熱さを感じながら僕は真っ暗な夜に沈んでいった。

アロマセラピーの夜に……。

それは決して終わることの無い夜だった。

アロマセラピーの夜 おわり

